

日本現代文學全集・講談社版

唐木順三 白井吉見 集
花田清輝 寺田 透
加藤周一

日本現代文學全集

104

唐木順三・白井吉見
花田清輝・寺田透集
加藤周一

編集

伊藤 整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙吉
山本健吉



昭和41年6月10日 印刷

昭和41年6月19日 發行

定價 500圓

© KODANSHA 1966

著者
から唐白はな花寺か加
き木い井だ田だとう藤
じゆん順吉よし清しゆう周
ぞう三み見てる輝とおろ透いち

發行者 野間省一
印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3~19
電話東京(942) 1111 (大代表)
振替東京 3 9 3 0

印刷製本函皮表紙繪口本函見扉
寫版製背紙用文貼返用
眞印製函皮表紙繪口本函見扉
大日本印刷株式會社
株式會社 興陽社
株式會社 大進堂
株式會社 岡山紙器所
株式會社 第一紙藝
株式會社 石井
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本州製紙株式會社
安倍川工業株式會社
三菱製紙株式會社
神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

唐木順三	臼井吉見
花田清輝	寺田透集
加藤周一	目次

卷頭寫眞

唐木順三集

無用者の系譜	七
兼好	三
世阿彌	三
梅宮覺書	四
北村透谷	五
鷗外と漱石	三
人間と自然への共感	六

臼井吉見集

芭蕉覺え書	八九
短歌への訣別	一〇五
島崎藤村	一〇八
「新しき村」と「共生農園」	一一三
志賀直哉	一一三
川端康成	一一七
太宰治	一二四
エジプトにて	一三七
戦歿者追悼式の表情	一六一

花田清輝集

鏡のなかの言葉	一五
變形譚	一七
罪と罰	一七
ドン・ファン論	一八
笑い猫	一九
「慷慨談」の流行	一九
現代史の時代區分	二〇
群猿圖	二〇
刺青談義	二四

寺田透集

歲月	二五
時間と社會	二五
バルザックとスタンダール	二六
藝術家と藝人	二五
『近代繪畫』讀後	二七
アトリエ訪問	二六
『和泉式部日記』序	二六

加藤周一集

親鸞	二九六
森鷗外	三三
中立主義の二十年	三二
現代日本語と社會	三九
讀書の想い出	三六
仲基後語	四一

作品解説	瀨沼茂樹 三七
唐木順三	
臼井吉見	
花田清輝入門	篠田一士 三六
寺田透	
加藤周一	
年譜	三五
参考文献	四二

唐木順三集

靜夜草庵裡獨奏

沒絃琴調入風雲絕
聲和流水深潭々々
盈溪谷飄々度山林
自非耳聾漢誰聞

希琴音

昭和四十一年試筆 順三書

無用者の系譜

1 在原業平

——身を用なき者に思ひなして——

業平は天長二年（西暦八二五年）に生れ、元慶四年（八八〇年）五十六歳で亡くなつた。

都をいまの京都に遷した桓武天皇の後をついで平城天皇が立つた。平城天皇の子に阿保親王という方があつた。わが子たち四人を臣籍に下させ在原氏を名乗らせた。業平は阿保親王の子であり、兄に行平がいた。業平はだから平城天皇の孫に當る。生母は桓武天皇の女、伊登内親王である。まさに高貴の家柄である。

業平は二十五歳にして始めて従五位下に敍せられた。三十九歳のとき左兵衛權佐という役目につき、翌年權少將に登り右馬頭となつた。五十一歳で右近衛權中將になり、翌々年従四位上になつた。これが彼の最上の官位である。伊勢物語が在五の物語、在五中将日記等とよばれたのは、五位の中將であつた在原の業平の物語の略記である。

家柄は高貴であつたが、官位は遅々として進まない。藤原良房が太政大臣になつたり、攝政になつたり、源融が左大臣になつたり、藤原基経が右大臣になつたりしている時代に、皇孫である業平

はたかだか在中將の名でしたしまれていた程度である。ここには何か原因がなくてはならない。

業平の祖父にあたる平城天皇は、經書に通じていたばかりでなく、文藻に巧みであつたといわれてゐる。事實、當時の漢詩集である淺雲集などにもその詩が載つてゐるし、また和歌も作られてゐる。古今集春歌下にも、「故郷と成りにしならの宮こにも色はかはず花はさきけり」の御作が載つてゐる。古京となつて荒れてしまつた奈良の都にも、普通りの花が咲いてゐるといふのだが、これは單なる感傷ではない。天皇は在位わずか三年餘にして位を弟の嵯峨天皇にゆずり、平安京を去つて奈良に轉居された。新しい都の空氣、新興の勢力、新來の制度文物にあきたらぬものを感じられたのであろう。

桓武、平城、嵯峨、淳和の四代の天皇の時代の年代記で特にめだつのは、渤海や新羅から、ひんびんとして使節がやつてきたことである。集團的な歸化人も多くでてきた。ある場合には百八十人という新羅人が一時に歸化してゐる。そういう來朝者また歸化人が現實にどういふ働きをしたかは詳かではない。恐らく平安京の新しい造營、新しい建設のひとつの力とはなつてゐたであらう。また唐制、唐儀の採用にも力となつてゐたであらう。また漢學、漢詩文の隆盛の力ともなつたであらう。そうして新興の宮廷勢力としての藤原氏は、それとどこかで手をつないでゐたであらう。

そういう新しい勢力に反撥した、ひとつのあらわれが藤原薬子の亂であつた。薬子等は一旦退位した平城上皇にすすめて舊都奈良に再び都を遷すことをすすめた。こと成らずして薬子は毒を飲んで自殺し、上皇は落飾し、皇太子であつた上皇の第一皇子高岳親王は廢せられ、その弟であり、行平、業平等の父であつた阿保親王は一時太宰權帥に遠ざけられたのである。高岳親王は僧籍に入り、名を眞如とあらため、空海について佛典をおさめ、さらに老齡にして唐に渡り、歩をすすめて天竺までの求法の旅に出られたが、途中で病

歿された。高邁にして不羈フキウの精神の所有者であつたことがわかる。この親王は業平の伯父にあたるわけである。

業平の兄の行平に、「わくらばに問ふ人あらばすまのうらにもしほたれつつわぶとこたへよ」の歌があることは有名だが、古今集はこの詞書に「田むらの御時に、事にあたりてつづくにのすまといふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける」と書いてゐる。田むらの御時、というのは文徳天皇の時代に、ということである。事にあたりて、というのが具體的にどういふ事件であつたかはこだけではわからない。然し、「事」が次のような事件ではなかつたかという推定は無理ではない。文徳天皇には惟喬親王という第一皇子があつた。母は紀名虎の女である。名虎には有常という男子があり、その女は業平の妻である。惟喬親王はだから業平の妻とは従兄妹である。ところで天皇の第四皇子の惟仁親王が、生後九カ月という赤ん坊のまま皇太子につくという異例なことが起つた。その母は藤原良房の女である。良房は當時右大臣で、やがて太政大臣となるところである。紀氏は惟喬親王の立太子を願ひ、またその運動をした。紀氏に近い在原行平もこれに加つたとみても不自然ではない。結局良房の勢力に壓倒せられて事は成らなかつたが、これが行平の須磨流謫の因となつたのであろう。

伊勢物語の一節、いわゆる布引の瀧を觀る段にもいかにも行平らしい行平の歌が出てゐる。「我が世をば今日か明日かと待つかひの涙の瀧といづれ高けん」といふ、鬱勃たる歌である。志を抱いて志をえない者の述志である。もしはたれつつわぶと答へよの語感にも既にそれがあらわれてゐる。(布引の瀧での歌は、古今集卷十七では、「こきちらすたきの白玉ひろひをきて世のうき時の涙にぞかる」となつてゐる。伊勢の作者はこの歌の心を汲んで、更に一層行平らしい歌に作りかえてゐるわけである。)

平城天皇御自身といひ、その長子の高岳親王といひ、また、紀名虎といひ、在原行平といひ、それぞれに高邁の志をもつて世に容れ

られず、落魄ロクパクの境にありながら、なお鬱勃の情をおさえかねてゐるところがある。私の主人公の業平の近親、姻戚、兄弟はそういう人たちである。ところで業平自身はどうであつたか。

業平の歿したとき、三代實録の筆者は業平を次のように評したといふ。「體貌は閑麗、放縱にして拘せず、略才學無し、善く和歌を作る。」ここの才學無し、というのは、當時流行の漢才漢學の物差からいつてゐることであらう。あなたがちに輕侮の心でもないであらうが、もとより尊敬の心でもない。放縱にして奔放であつたことへの評價もそれと同様である。ただ體貌の閑麗であつたことと、和歌に長じていたことだけは認めざるをえなかつたわけである。私はたつたこの四句から想像するのだが、業平においては、祖父の平城天皇、伯父の高岳親王、兄の行平、義祖父の紀名虎には無いものがあらわれてゐると思ふ。發生の地盤はもとより共通だが、そのあらわれ方がそれたものになつてゐる。つまりはデカダンの徒のにおいがするのである。フランスの世紀末のデカダンを單に頽廢墮落の無頼の徒とはひと思わぬであらう。頽廢において美しく、無頼において倫理的であるというイロニイが、すでに九世紀の日本にあらわれてゐると私は思うのである。伊勢物語の作者が業平において感じたもの、またかくの如きものが業平の姿であつたとして描いたもの、その「昔男」の像は、私の感じた業平であつた。いや逆に、實は私の業平像は、伊勢物語の「昔男」を通してのそれであるということにならう。

伊勢物語の作者の問題に入るまえに、ここでこの物語の傳へてゐる二つのことを書いておきたい。

ひとつは例の惟喬親王の春の宴遊のことである。親王は水無瀬みなせに別荘をもつてゐた。櫻の頃にはそこへゆかれるのが例年のことであつたが、今年も右馬頭である業平をともなつてゆかれた。業平四十歳臺、親王二十歳臺のころである。櫻狩という名目であつたが、そ

の方には心もいれず、もつばら酒ばかり飲んで歌を作り合つた。業平の歌は「世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」というのである。これは言外に花の如き親王、當然に皇位をつぐべき筈であつた親王に對する業平の愛惜と無念とあわれを言つてゐるのである。すると居合せた一人が、「散ればこそいとど櫻は愛でたけれうき世に何か久しかるべき」と詠んだ。皇位に望みを失われた親王が反つて自由でよいのではないか、とき世を讚えている良房一門も「何か久しかるべき」という、これも諦觀のあわれの意味を含んでいる。

日暮になつてまた酒ということになつた。酒また酒を飲んで、即興のなぐさめ歌を誦し合つた。水無瀬の宮へ歸られてまた夜の更けるまで飲み交わしたが、親王は酔つて寢所へ入ろうとした。業平がすかさず、「飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ」と詠んだ。一緒にいた紀有常（名虎の子、業平の妻の父）もそれに合せて、「おしなべて峰も平になりなむ山の端無くば月も入らじを」と詠んだ。伊勢物語の八十二段は右のようなものである。次の段ではこの親王がその翌年に出家され、比叡山の麓に隱遁されたことが書かれている。

この親王にはいままら政治的術数をつかつて勢位を回復されようとする志はない。業平もひごろ親しみ仕えた親王ではあるが、また心の通じ合つた間柄ではあるが、兄の行平のように、もう一度親王をして春の世に會わせたいというような意圖はない。そういう話をするのも互に物憂いばかりである。しかし心の底にはまた互に鬱するもの、時世を慨するものをひそめてゐる。それが酒になる。酒になつていささかの鬱を散じ、それによつて落涙するのである。落涙をまた恥じて、さらにまた酒になり、一夜を飲みあかすという仕儀に立至る。賢人の清談とも遠いがまた自暴の慨世でもない。憂いも儼きも美しい三十一文字となつて、互に了解しながら春も一日一夜を興ずるといふわけである。恐らくこの遊樂の裏には次の年の出家

も黙々のうちに了解されていたのであらう。それを口にはださずに飲み交すところに友情の濃いものもあれば、たしなみもあるというものである。業平におけるデカダンスとはそういうものであつた。もうひとつ書いておきたいのは、藤原國經（しげのくに）、基經（もとね）の妹高子と業平のことである。高子は後に二條后といわれ、清和天皇の后であり、陽成天皇の母である。伊勢物語の四、五、六の三段はこの女性とのいきさつである。業平は高子を想う歌をいくつかを作つてゐる。

思ひあらば菴（やま）の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつても
月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にいつて

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

これらの歌にはそれぞれの曰くがついてゐる。それをここで書く餘裕はない。いずれもあわれな歌であり、戀いわびた歌である。基經は陽成天皇の攝政となる人である。高子はその妹にしてやがて天皇の母となつた人である。そういう身分の女性を愛する資格は、業平においては不釣合ではない。しかし現實の勢威という點になればはるかにかけ離れてゐる。かけ離れていても懸想（けんそう）はできる。この懸想に己がいのちをかけることもできる。いのちをかけても勝利のよろこびを味わえないことは、ここでは既にわかつてゐる。高子には高子を守る鬼もがついてゐるのである。「打ち泣きて」「泣く泣く歸りにけり」「行けどもえ逢はで歸りけり」「足ずりして泣けども甲斐なし」。そういう言葉が度々出てくる所以もそこにあるのである。「月やあらぬ」の歌、「白玉か」の歌の生れてくるころもそこにある。世間はこのいきさつから業平を「すきもの」「おそろしきすきもの」と呼んだが、業平の心に戀わびはあつても、好色のすきはない。すきものであつたことを否定はしないが、このすきは西鶴の好色物の人物とはまるで違ふ。ここには一種のきよらかなあわれがある。

これだけのことをいつておいて伊勢の作者について考えたい。

私がここで最も書きたいのはいうまでもなく、業平あずま下りといわれている七、八、九の三つの段である。各段の初めを引いてみよう。

第七段、「昔、男ありけり。京にありわびて、東に行きけるに。」
第八段、「昔、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東の方にいきて住み所求むとて、」

第九段、「昔、男ありけり。その男、身をえうなき者に思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國求めにとて行きけり。」

問題はこの中の「京にありわびて」「京や住み憂かりけむ」「身をえうなきものに思ひなして」である。

第七段の歌、「いとどしく過ぎゆく方の戀しきにうらやましくも返る波かな」は後撰集十九羈旅の業平朝臣の歌である。この歌には、「東へまかりけるに、過ぎぬる方戀しく覺えけるほどに云々」という詞書がついている。しかしここには「京にありわびて」の言葉はない。第九段の、「唐衣着つつなれにしつましあればはるばる來ぬる旅をしぞ思ふ」という有名な歌は古今集巻九羈旅哥からきてゐる。これにも長い詞書がついているが、またその詞書を伊勢の作者はすべて利用しているが、この詞書には、「身をえうなき者に思ひなして」の言葉はない。

伊勢物語の作者は誰か、という点については古來諸説がある。然し今日のところ、誰というきめ手が無いというのが専門學者の通説となつてゐる。ただ古今集より後にこの物語ができたであろうことは大體確かだといわれている。

後撰集や古今集から歌をとり、またそれらの詞書をすべて利用しながら、詞書にはない「京にありわびて」とか、「身をえうなき者に思ひなして」という言葉を新しく付け加えたのは何故であろうか。ここには新しい業平解釋がある。現實の業平を一個の業平像として造型しようとする意志がある。理想的な人間像、一典型を創造しようとする意志である。私はこれを重要視せざるをえない。三代

實録にも既に「業平體貌閑麗、放縱不拘、略無才學、善作和歌」という記事のあることは書いた。これも解釋である。しかしこれは説明であつて、新しい人間像の創造ではない。美男の業平が放縱であり不羈であつたのは何故か、また如何なる歌を如何に作つたかの解明はここにはない。私は東下りにつけられた、「京にありわびて」「京や住み憂かりけむ」「身をえうなき者に思ひなして京にはあらじ」の言葉こそ業平という人間像創造の核心をなすものだと思ふ。直接存在としての業平から、自覺存在としての業平への飛躍がここに飛躍といつてもよい。そしてこの飛躍をなしたげたのは業平自身であつたとみてもかまわない。古來から伊勢物語は業平の自作という説があつた。そうであつてもかまわないのである。また業平をかくの如き業平として造型した他の作者があつたとしてもかまわない。要はここに一個の新しい人間像が日本の歴史の上に造型されたということである。

私は「京にありわびて」、また「住み憂かりけん」、さらに「えうなき者に思ひなして」の原因を、物語の序列に従つて、例の高子との脱走、その失敗また世間の忌憚によるものとは思わない。物語の順序に拘泥すればそうなるが、そうでなくともよい。それはこの物語自身が示している。あり侘び、身を益なく、役なく、用なき者と思ひなす理由は業平の全存在にかかわつてゐる。業平のおかれた時代と社會の環境、業平の性格と意志、そういう全體にかかつてゐる。平城天皇、高岳親王、惟喬親王、紀名虎、有常、また兄の行平、そういう業平に近い人たちの生き方、生かされ方に關係するとともに、業平という一個獨立の個性人の生き方、考え方に關係してゐる。

私はもどかしい思いをして、ここで足踏しているのだが、言いたいことは、京にありわびること、身を用なき者と思ひなすことによつて、新しい世界、現實とは次元を異にする抽象、また觀念の世界

が開かれたということである。抽象とか観念といえは直ちに誤解に突當りそうだが、しばらくそういう言葉を取つて使つておこう。京を捨て、京を住み憂く思い、京にはあらじと決意して東へ下るといふ旅によつて、新しい世界をもつた。それは東國という未知未開な場所とする程のことでなく、京を捨て離れることによつて、京が新しくよみがえつてくるという新しさである。肉體をもつた戀人、近接した色戀から離れることによつて、心の戀、觀念の戀が開かれてきた。

「白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを」と詠つたとき、また「わが身一つはもとの身にして」といつたとき、すでに業平はこの世のものではないものをみていた。そういう激情を経て、そういう終末觀をへて、東國に下つたのだが、この旅での第一句、「いとどしく過ぎゆく方の戀しきにうらやましくも返る波かな」で京やまたおのが戀が、ほのぼのとした形で見返されてくる。「唐衣着つつなれにしましあればはる來ぬる旅をしぞ思ふ」「駿河なる宇津の山への現にも夢にも人に逢はぬなりけり」という旅中の歌は京から遠ざかれば遠ざかるほど、抽象的な思慕の情がつつてくることを示している。隅田川までたどりついたとき、「限りなく遠くも來にけるかな」と侘びあつたことが誌され、例の「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありや無しやと」がつくられ、「船こぞりて泣きにけり」と書かれていた。東への旅の果において、激しく都が心のなかによみがえつてきた。侘びはてたところにおいて、「わが思ふ人はありや無しや」と問うことによつて、思ひ人が心の中にきわだつてよみがえつてきた。こぞつて泣いた號泣のなかに、京やそこの戀人たちが現實よりも一層具象的に、匂いたつたことであらう。

業平の兄の行平が流謫の地にあつて、「わくらばに問ふ人あらばすまのうらにもしほたれつつわぶとこたへよ」の歌を、「宮のうち

に侍りける人に」つかわしたことは既に書いた。業平とも交りのあつた小野貞樹は甲斐守として遠い任地にあつたとき、「京へまかりのぼりける人につかはしける」といふ詞書のついた歌、「みやこ人いかにとはば山たかみはれぬくもめにわぶとこたへよ」を讀んでゐる。行平の「わぶ」も貞樹の「わぶ」も、都を離れた僻地にあることを「わび」たものであり、京へ上ることをのぞみながら、また都で一はたらきすることを願ひながら、いまの自分の失意と落魄を述べたものであつた。ここには競望の心がある、自負の心が動いてゐる。

業平の「わぶ」は、それらとは違つて一面をもつ。「露とこたへて消なましものを」といふ體験を通過している。祖父にあたる平城天皇以來の政治勢力の更替をみてきている。惟喬親王の失意を酒において忘れようとし、浮世の勢力よりもむしろ酒中の歡をつくそうとしてゐる。「うき世に何か久しかるべき」が彼等の感慨であつた。つまりはデカダンの徒であつた。だからこそ、「京にありわびて」東に下るのである。京にあつて京をわびるのである。「京や住みうかりけん、あづまにゆきて住む所もとむとて」ということが當然にそこから出てくる。東國や流謫地にあつて、わが身をわびるのではない。京にありわびて、新しい天地を求めようといふのである。「身をえうなき者に思ひなし」で、京にはあらじ、あずまの方に住むべき國をもとめることが歸結として出てくる。業平の場合、わぶの根底には、自分を無用者として自覺したということがあつた。つまりは憂き世をわびたのである。世間における無用者であることを選びとつたのである。その無用者において始めてひらかれた觀念の世界、つまりは憂き世から離れることによつてひらかれた心の世界を歌にした。「名にし負はば」の歌はそれを具體的に示している。これは萬葉や記紀の歌とは違つて世界である。直接具體の世界とは次元を異にする境である。

憂き世をわびたといつたが、これは佛教の厭離穢土、欣求淨土と

は違ふ。無常觀とも違ふ。露と答へて消えなましものを、といつたのは、戀愛の最高の姿の表現、つまりはみやびの表現であつて、無常觀ではない。京をわびて東へ下れば下るほど、いよいよ鮮明に京が映像として出てきている。遠くなればなるほど、心は京の空に馳せている。厭離と欣求がここでは別の對象ではない。離れることによつて近く、遠ざかることによつて強烈な思いにかられる。そういう矛盾が業平文學、つまりは伊勢物語を生んだのである。私の使ひなれた言葉でいえば、自分を無用者として自覺することによつて、現實世界はひとつの變貌（トランスフィグレーション）をきたし、舊來の面目をあらためたのである。觀念世界の誕生といつたのはそれをつたのである。これは日本の歴史において畫期的なことといつてよいだろう。もののあわれも、みやびも、この業平體驗なくしてはありえなかつたに違いない。源氏物語が伊勢物語なくしてはありえなかつたといわれる所以もそこにあるのだが、單にそういうことばかりではない。古代にはなかつた遠隔作用がここに始めてでき、それが王朝文化、文學の基礎をなしていると思ふのである。

放縱不拘と簡單にいわれている業平を、業平體驗にまでたかめ、古今集の詞書に、身を用なきものという一句を加ええた伊勢の作者を私はあらためて考える。従四位上を極官として死んだ業平を、また他の物語類が、「おそろしきすずきもの」としてしか解しえなかつた業平を、業平像という典型にまで造りあげた作者の功績を思わないうわけにはゆかない。業平像の根底をなすものは、「身をえうなきものに思ひなして」の一點にあると私は考える。

2 一遍上人

——遊行の捨聖——

(1) 一遍の先達たち

私には空也について二つの思いがある。ひとつは芭蕉の句から鮭も空也の瘦も寒の中

である。この句は妙に頭にこびりついている。これは比較的晩年の句である。芭蕉には「雪の朝ひとり干鮭を噛み得たり」もあれば「鹽鱒の齒くきも寒し魚の棚」の句もある。私にはそれぞれ空也にないものだが、空也の瘦の句が殊に印象が深い。芭蕉はこの句について、「心の味を云とらんと、數日はらわたをしぼる」と弟子の土芳に語つてゐる。鮭と空也と寒でひとつの冷えさびた世界ができ上つてゐるといつてよい。ここに空也の瘦というのは空也自身の瘦とつてもよいし、空也念佛僧とつてもよいだろう。具體的には當時の念佛僧であつたらうが、遠くは空也上人自身につながる。なお芭蕉には「長嘯の墓もめぐるか鉢叩」「納豆きる音しばし待て鉢叩」などの句がある。鉢叩というのは京都の空也堂の念佛僧たちが、十一月十三日から四十八日間、市中を瓢をもち鉦をたたいて念佛稱名しながら歩くのをいうのである。その他俳諧世界には鉢叩が多く出てくる。芭蕉以後の時代までこの行事はさかんであつたであらう。

もうひとつ空也で忘れ難いのは、かつて京都でみた空也上人の木彫の像である。鎌倉期の康勝の作だという。この像はおのずからにして空也の瘦を思わせる。左の手に鹿の角のついた杖をもち、胸に鉦をかけ、右手は撞木をもつて、念佛行脚しているところである。口から六人の小さい佛の姿を吐きだしている。念佛三昧の枯瘦の僧形である。草鞋をつけた脚は細いが何百里を歩きつづけた脚であ

る。衣は短かく袖は風にゆらいでいる。鎌倉期の特徴で、それがありのままに表現されている。

以上のふたつから私はかねて空也に對して關心をもつていた。踊り念佛行者の瘦せ枯れた姿に妙なかわり合いをもつていたわけである。ところで今度一遍を讀んでゆくうちに、たびたび空也上人に言及してゐるところがあり、上人を自分の先達といつてゐるところもあつた。私はあらためてこの上人について手元の資料をしらべてみる氣になつた。

空也上人は天祿三年に七十歳をもつて歿した。西暦でいへば九七二年で、藤原兼通が關白になつた年である。醍醐天皇の皇子とか、仁明天皇の皇孫とかいう傳えもあるという。若くして佛法に歸し、弘法や行基と同じように、各地を周遊して嶮道を平にし、橋梁を架し、井戸を掘つたという。その脚は陸奥、出羽にまで及んだが、三十何歳かるとき京都におちつき、市聖、阿彌陀聖、市の上人等とよばれた。市中に食を乞ひ、念佛して歩き回つたという。あるとき鞍馬山の近くで、平定盛が鹿を獵して歸るのに會ひ、殺生の恐るべきことを教えたところ、定盛は直ちに悔いて剃髮して弟子になりたうことを申しでたが、今すぐに出家しては妻子が困であらう、俗形のまま、これをたたいて念佛せよといつて瓢を與えた。定盛はそれ以來毎夜この瓢をうちながら市中を念佛して回つたという。これが念佛鉢叩の始めともいわれてゐる。

空也の法語に次のようなものがある。

「心に所縁無く、日暮に隨つて止み、身に所住無く、夜明に隨つて去る。忍辱の衣厚くして杖木瓦石も痛からず、慈悲の室深くして罵詈謗を聞かず、口に任せて三昧、市中はこれ道場、聲に隨つて佛を見る、息精は即ち念珠。夜々に佛の來迎を待ち、朝々に最後の近きを喜ぶ。三業を天運に任せ、四儀を菩提に讓る。」

また次のようなものもある。

「孤獨にして境界無きに如かず、稱名して萬事を抛つに如かず。聞

淨隱士は貧を樂となし、禪觀幽室は靜を友となす。藤衣紙衾はこれ淨服、求め易くしてさらに盜賊の怖れなし。」

空也は弘法や行基と同じように橋をかけたたり井戸を掘つたりしたというから、そういう點では無用者どころではない。然し私がここで特に言ひたいのは一遍の空也理解の仕方である。一遍は語録のなかで次のように言つてゐる。「むかし空也上人へある人念佛はいかが申すべきやと問ひければ、捨ててこそ、とばかりにて、なにと仰せられずと、西行法師の選集抄に載せられたり。これ誠に金言なりことであつた。また「空也上人はわが先達なり」の語について、前記の空也の法語をひき、自身も空也にならつて、「身命を山野に捨て、居住を風雲にまかせ、機縁に隨つて徒衆を領し給ふといへども、心に諸縁を遠離し、身に一塵をもたくはへず云々」という生活を送つたことが誌されている。一遍には己が先達として、空也の像に似ている。しいていへば一遍像の方がさらにもまして庶民的で、空也のもつてゐる杖もなければ鉢もなく、跣足で念佛行脚している姿である。空也が市聖とよばれたのに一遍が捨聖とよばれたのは、捨ててこそ空也から受けながら、捨てに捨てることを實踐によつて示しているからであらう。

『一遍聖繪』第四には、例のおどりの念佛が空也に由來していることを書いてゐる。建治二年といへば一遍の三十八歳のときだが、その年の秋にはじめてたまたま信州の佐久にあつた一遍は踊躍大歡喜のおどりの念佛を始めた。その踊躍念佛の先達として京の四條の辻で踊つた空也のことを書いてゐる。空也以來おどりの念佛はないことにはなかつたが、その「利益あまねからず、しかるをいま時いたり機熟して」一遍の大歡喜となつたことを書いてゐる。「はねばはねよ、をどらばをどれ、はる駒の、のりのみちをばしる人ぞしる。」「ともはねよ、かくてもをどれころごま、みだのみのりとときくぞうれし

き。」これがそのときにできた一遍の歌である。

一遍が己が精神的先達としてあげているもう一人は教信沙彌である。『一遍聖繪』第九には、弘安九年（二二八六）に播磨國の印南野に行脚の足をとめたことを次のように書いてある。「本願上人（教信）の練行の古跡なつかしく思ひ給ひながら、やがてとほり給ふべきにて侍りけるに、いかなる事かありけむ、教信上人のとどめ給ふとて一夜とどまり給ふ。人あやしみをなし侍りけり。」また一遍は教信と同じ土地で最期をとげたいとも語っている。

教信の傳はつまびらかではない。十歳にして佛門に入り、南都興福寺に學び、殊に唯識また因明に精通したという。ひとかどの學匠でもあり、また寺内にいれば何一つ不自由でない生活ができたのに、深く厭離穢土、欣求淨土の心を發して、本寺を出て跡を晦まし、身に灰をぬつて西へ西へと歩み、播州賀古に至りつき、そこに草庵を結び、僧に非ず俗に非ずの生活を送つた。髪も剃らず、爪もきらず、袈裟もきず、本尊もなく、妻女を帶して里の人たちに雇使されて、或いは田畑を耕したり、荷物を運んだりしていたが、常に念佛稱名していたので、阿彌陀丸とよばれた。念佛の外萬事を亡失せるが如し、ともいわれている。貞觀七年（八六五年）に歿した。葬るに資なく屍を群犬の食うにまかせたという。一遍は往生の前に、「わが門弟子におきては、葬禮の儀式をととのふべからず、野に捨て獸にほどこすべし。但し在家の者結縁のこころぎしをいたさるをばいふにおよばず」と語つてゐるが、ここにも一遍の教信との精神的なつながりをみうるだろう。

なお親鸞は一遍を斥けながらも、「われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」といひ、愚禿と名のつたことは、「僧にあらず俗にあらざる儀を表して、教信沙彌のごとくなるべし」の意であるといつてゐる。（『改邪鈔』）。

親鸞や一遍が、教信をおのが先達といつたのは、この沙彌が興福

寺という大寺の碩學であり、また裕福な暮しのできる身分でありながら、そこを脱出して艱光晦跡、乞食生活をしながら念佛三昧の生活を送つたという點にあつた。天下の無用者となりながら、念佛だけを用としたことにあつた。この傳統は日本の文化の中に案外に深くまたたちきられずにつづいてゐる。最澄や空海の死歿のときから三、四十年して歿したこの沙彌が案外に深い影響を及ぼしてゐる。葬儀の費用もなかつたといわれた草庵の跡には、歿後間もなく、清和天皇から寺領八百石と三千貫を下賜され立派な寺院が出来たという。それがまた衰微したが、その衰微のままに、數百年をへて親鸞や一遍に直接のひびきを與えてるのである。ここへ詣つた一遍が、四百餘年前にここで死んでゐる教信と、直接の會話をしてゐることは、前記の聖繪のいう「教信上人のとどめ給ふとて云々」の言葉からも察せらるるわけである。

一遍とは直接の關係はないが、ここにもう一人長増について書いておきたい。これは『今昔物語』卷十五にもでてゐるし、鴨長明の『發心集』卷一にも出てゐる有名な話である。私はこの兩方から適宜にとつて誌しておく。

昔、比叡山の東塔に長増という僧がいた。顯密の法文を學び、信仰も深く頭も良かったが、ある日則に入つたまま、ふと消えてしまつた。一物ももたず、念珠袈裟までおいたままで行方不明になつたので、寺では大騒ぎをして探してみたがとんとわからないまま長い年月がすぎた。たまたま伊豫の守となつて任地へゆく藤原の某の祈りの師として、かつて長増の法弟子であつた清尋という僧が選ばれて、ともに任地へいつた。國守はおのが祈りの師を敬い立派な房を造つてそこに住わせ、警護の者もそこにつけておいた。ところである日のこと、縁のびろびろに破れた田笠という垢じみた笠をかぶり、そそけた糞を腰にまつつた乞食姿の老法師が門に立つた。宿直の者どもが追い歸そうとして騒いでいるとき、清尋が障子をあけて